

6 2年間の成果と今後の課題

令和5年度の実態把握を起点として、令和6・7年度の2年間、本校はPISA型リテラシーを土台とした授業改善と「学ぶ意欲」に焦点を当てた取組を進めてきました。

学力調査から見たこと

成果

墨田区学習状況調査と全国学力・学習状況調査の結果を見ると、本校の学力水準は3年間を通して多くの教科で区や全国の平均を上回り、「知識・技能」については安定して高い水準を維持してきました。令和6・7年度の取組を通して、数学では記述式問題を含む「思考・判断・表現」の正答率が改善し、国語でも資料を用いた読み解きや記述の領域で相対的な位置が高まるなど、PISA型リテラシーを意識した授業改善の成果が表れています。

課題

一方で、「思考・判断・表現」に関わる活用問題や記述式問題では、教科や学年によって伸びに差が見られ、全ての領域で大きな向上が見られたとは言い切れません。また、基礎的な内容の定着や記述量・表現の質には個人差が大きく、授業内外で一人一人の学習をどのように支えていくかが、今後の課題となっています。

生徒質問紙・授業評価から見たこと

成果

質問紙や授業評価アンケートでは、「学校は楽しい」、「授業は分かる」といった学習環境に関する項目が、2年間を通して高い水準で推移していることが分かりました。令和7年度には、「授業で自分の考えを話している」、「友達の意見を聞いて考えを広げている」と答える生徒が増加し、価値観を揺さぶる間いや評価基準の提示、目標設定の工夫が、授業への参加意識や学びの深まりに一定の効果をもたらしていることが確認できました。

課題

一方で、「授業後に自分で調べたり考えたりする」、「家庭学習で授業内容を確かめている」といった項目に、1・2年生では横ばいからわずかな低下が見られ、3年生で大きく伸びるという傾向が続いています。授業中の意欲は高まっているものの、授業外の主体的な学びや学習習慣としてどこまで根付いているかについては、まだ十分とは言えず、継続した取組が必要です。

おわりに

2年間の取組を通して、本校では、PISA型リテラシーの視点から授業を設計し、「主体的な学びを促すための導入・問い合わせの工夫」、「評価基準の提示」、「目標設定と振り返り」といった具体的な手立てを共通言語として語り合う土壤が育ってきました。授業の場面では、自分の考えをもって問い合わせに向き合い、友達の意見を手掛かりに考えを深めようとする生徒の姿が広がりつつあります。

今後は、こうした授業改善を日常の授業の中に更に定着させるとともに、家庭学習や個別の支援、進路指導との連携を通して、授業外の学び方や学習習慣をどのように育していくかが重要になります。生徒一人一人が、学校での学びを自分の将来や社会の課題と結び付けながら、主体的に学び続ける力を身に付けていけるよう、取組を継続していきます。

special thanks

共栄大学 教育学部 教授 島内 啓介 先生

〒130-0015 東京都墨田区横網1-8-1
TEL : 03-3625-0361



墨田区立両国中学校

令和6・7年度 墨田区教育委員会 研究協力校 研究発表会

主体的に学びに取り組む生徒の育成 ～学ぶ意欲の向上による学力向上～

本校は、令和6・7年度に墨田区教育委員会の研究協力校として、「主体的に学びに取り組む生徒の育成～学ぶ意欲の向上による学力向上～」を主題に、全教員・全教科で授業改善に取り組んできました。生徒には、知識として知っているだけではなく、資料を読み取り、自分で考え、仲間と話し合いながら課題を解決する力が求められています。本校では、こうした力を育てる授業づくりを進めることで、生徒が「分かる」、「できる」と感じながら学習意欲を向上させることで主体的に学ぶ生徒の育成を図りました。本リーフレットでは、この2年間の取組と、生徒の学ぶ姿の変容について御紹介いたします。

墨田区立両国中学校 校長 杉浦 伸一

1 研究のねらい

情報化や国際化が進む中で、子供たちには、未知の課題に向き合い、自ら学び続ける力が求められています。墨田区でも、資料を活用して考えをまとめる力を重視した授業づくりが進められています。

本校では、PISA型リテラシーを育てる授業を土台にすることで、生徒が学習の意味を実感し、「分かる」、「できる」という手応えを得て学ぶ意欲が高まり、そのことが結果として学力の向上につながるのではないか、という仮説を立てました。

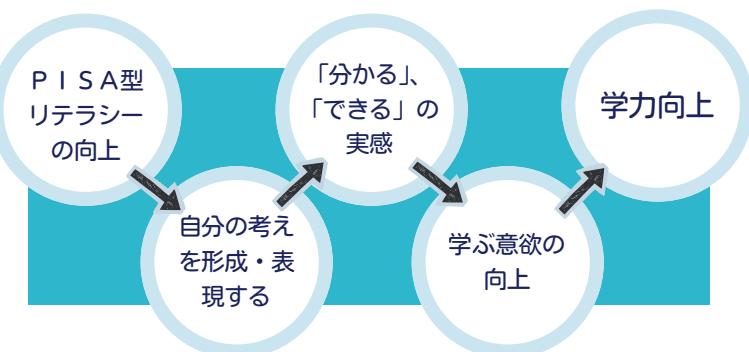


2 研究主題設定の理由

令和5年度の墨田区学習状況調査と全国学力・学習状況調査では、本校は多くの教科で区や全国の平均を上回り、基礎的・基本的な知識・技能はおおむね高い水準にあることが分かりました。

一方で、複数の資料を関連付けて考える問題や、自分の考えを文章で説明する問題では、区平均との差が小さく、観点「思考・判断・表現」の得点が相対的に低いことが明らかになりました。質問紙からも、「授業は分かる」、「学校は楽しい」と感じている一方で、「授業を振り返って次に生かしている」、「家庭学習で授業内容を確かめている」といった項目に課題が見られました。

これらの結果を踏まえ、本校では、資料を基に自分の考えを形成・表現する力を高める授業づくりを通して、学ぶ意欲と学力の向上を図ることを研究主題として設定しました。



3 PISA型リテラシーとは

PISA型リテラシーは、OECDの学習到達度調査に基づき、現実の課題場面で知識や技能を生かして考え、判断し、表現する力を捉えた考え方です。令和3年度から令和5年度にかけて、墨田区では千葉大学との連携研究を通して、この力を読み解き力・数学的リテラシー・科学的リテラシーの三つの柱から育てる授業づくりを進めました。本校の研究はその流れの中に位置付けています。

読み解き力

文章や図・グラフから情報を読み取り、要点をつかむ力

数学的リテラシー

数やグラフを使って、筋道を立てて考え、判断する力

科学的リテラシー

現象を科学的に見て、根拠をもって説明・予想する力

4 令和6年度

PISA型リテラシーに焦点を当てた授業づくり

研究指定1年目の令和6年度は、PISA型リテラシーを育てる授業づくりを全教科の共通課題としました。本校では、各教科が年間指導計画の中で「資料を読む」、「条件を整理する」、「根拠を示して説明する」場面を整理し、「どの単元でどの力を育てるか」を示したリテラシーの地図を作成しました。この地図を基に、指導案やワークシートに読み取り・整理・記述の場面を位置付け、授業をPISA型リテラシーの視点から見直しました。

数学科：1年「比例と反比例」

パリオリンピック・マラソンの記事を手掛かりに「『目の前が壁』と言われた勾配13.5%の坂は、どれくらいきついのか」を考える研究授業を行いました。生徒は新聞記事や身近な坂の情報から必要な数値を読み取り、勾配%の意味を基に、水平距離と高さの関係を式とグラフで表しました。さらに、一人1台端末で作成したグラフと木板を組み合わせて教室に勾配13.5%の坂を再現し、実際に登ってみる活動を通して、「実生活の事象を数学的に捉え、式やグラフで表し、その意味を現実の場面に戻して解釈する」という数学的リテラシーの学びを体験させました。



実践報告

社会科：2年「東北地方」

2年「東北地方」の単元では、震災後のJR気仙沼線を題材に、PISA型リテラシーの育成を意識した研究授業を行いました。「鉄道を復旧するのか、バス高速輸送システムに転換するのか」という問い合わせを中心に据え、人口の推移、復旧費用、防災上の安全性、高齢化の進行などの資料を読み取り、それぞれの選択肢の利点と課題を整理した上で、「どちらを選ぶべきか」「その理由は何か」を自分の言葉で文章にまとめました。振り返りでは、「最初は自分の感覚だけで考えていたが、資料の数字を根拠に考え直すことができた」、「どちらの立場にもよさと難しさがあることが分かった」といった感想が多く見られ、資料を手掛かりに考えを深め、根拠を示して説明するという科学的リテラシーの学びを実感する生徒の姿が見られました。

成果と課題（1年目）

令和6年度の取組により、墨田区学習状況調査において第2学年の「思考・判断・表現」は全教科で全国平均を上回るなど、資料を読み取り根拠を示して説明する力の伸びが見られました。一方で、教科間や個人差はなお残っていたことから、令和7年度はPISA型リテラシーを土台に、生徒の学ぶ意欲に焦点を当てて研究を進めることとしました。



主体的に学びに取り組む
生徒の育成に向けて

5 令和7年度

学ぶ意欲に焦点を当てた授業づくり

2年目の令和7年度は、令和6年度に積み上げてきたPISA型リテラシーを土台としながら、「生徒が学ぶ意欲をもって授業に向かっているか」に焦点を当てました。国語・社会・英語のAグループ、数学・理科のBグループ、音楽・美術・保健体育・技術家庭のCグループを編成し、それぞれが教科の特性を生かした手立てを通して、「学ぶ意欲」を高めることを目指しました。

Aグループ 主体的な学びを促すための導入・問い合わせの工夫 (国語・社会・英語)

Aグループでは、「主体的な学びを促すための導入・問い合わせの工夫」を授業の中心に据えました。11月の英語の研究授業では、「行きたい国」と「そこでどのように暮らしたいか・何をしたいか」を自分の言葉で表現する学習に取り組みました。行きたい国を挙げさせて関心を高めたうえで、「自分はなぜその国に行きたいのか」「その国の魅力をどう伝えるのか」といった問い合わせにつなげ、英語表現だけでなく、地理的な知識や異文化理解と結び付けて考えさせることで、学びの意味付けを深めることをねらいました。



Bグループ 評価基準の提示を通して学ぶ意欲を高める（数学・理科）

Bグループでは、「思考・判断・表現」の評価基準を生徒にも分かる言葉で示し、「何ができるべきか」「どこまで書けばよいのか」を見通して学べるようにすることをねらいました。7月の理科の研究授業では、「化学カリヨンの反応を止める方法」を課題とし、「条件を整理しているか」「結果と結び付けて理由を書いているか」などの評価基準を事前に提示したうえで考察を書かせ、評価基準を手掛けりに書き直す活動を行いました。振り返りでは、「どこまで書けばよいかが分かりまとめてやすくなった」といった声が多く聞かれ、評価基準の共有が学習の見通しと振り返りを支える手立てになることが確かめられました。



Cグループ 生徒ができるようになったことを実感するための目標設定の工夫(音楽・美術・保健体育・技術家庭)

Cグループでは、生徒が「できるようになったこと」を実感できるよう、目標設定と振り返りの工夫に取り組みました。7月の家庭科の研究授業では、エシカル消費を扱う研究授業を行い、生徒が自分の生活に関連付けて「できること」を考えることをねらいました。授業前後のアンケートと、一人一つのエシカル行動の目標設定・振り返りを組み合わせることで、「前よりエシカルマークに意識が向くようになった」など、意識と行動の変化を実感する姿が見られました。



成果と課題（2年目）

令和7年度の取組を通して、授業の場面では、問い合わせに対して自分の考えをもって参加し、友達の意見を聞きながら考えを深めようとする生徒の姿が多く見られるようになりました。評価基準や目標を共有することで、「どこまで書けばよいか」を自分で確かめようとする場面も増えました。振り返りでは、「前より自分の考えを言えるようになった」、「友達の意見を聞いて考えを変えることができた」といった記述が多く見られ、単元の終末には、「できるようになったこと」と「次にがんばりたいこと」を言葉にする活動を通して、学習の積み重ねや成長を実感する生徒の姿が見られました。